

【報告2】 2

資料と市民をつなぐ博物館図書室
——イギリス及び国内調査報告——

小宮山 めぐみ*

目次

はじめに

1. 大英図書館 (The British Library) とコンサベーションセンター (Centre for Conservation)
2. 大英博物館各部門図書室/スタディールーム (The British Museum Departmental libraries and Study rooms)
3. ヴィクトリア&アルバート博物館 (Victoria & Albert Museum) 及びナショナル・アート・ライブラリー (National Art Library)
4. セインズベリー日本藝術研究所リサ・セインズベリー図書館 (Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures Lisa Sainsbury Library)
5. 国内での事例として、立正大学古書資料館

おわりに

キーワード 博物館図書室 大英図書館 大英博物館 ナショナル・アート・ライブラリー
セインズベリー日本藝術研究所リサ・セインズベリー図書館
立正大学古書資料館 資料保存 デジタル化

はじめに

江戸東京博物館図書室 (以下、当室) は、博物館の附属施設として1993年に開室した。以来、江戸東京研究の拠点を担ってきたが、開室から25年を経て当室を取り巻く環境や利用者層は当初より大きく変化している。

まず、社会全体において電子化が進み、紙媒体に限らない情報の流通が急増した。さらに、それらにアクセスする情報端末の普及によって、わざわざ出向かなくても必要な情報は大方手に入る時代になった。それに伴い、図書館界では来館者の減少が懸念されて久しい。公共図書館等では既に対策を進めており、文化複合施設の中へ図書館を置きカフェスペースを設けるなどして、情報を提供するだけでなく

*東京都江戸東京博物館司書

利用者同士が交流を持ち情報を交換できる場を提供することで、図書資料だけではなく新たな価値を付加している。運営面でも各館様々な取り組みを行っており、枚挙に遑がない。このような時代の変化に直面し、当室ではどのように対応していくのが近年の課題となっている。

当室の大きな特徴は、豊富なコレクションを持つ博物館の附属施設であり、普段利用者の閲覧に供する図書室の書籍も博物館資料と据え、保存している点である。他には無いこれらの特徴を活かし、新たな時代に向けて当室の在り方を再考するため、世界最大の博物館のひとつである大英博物館をはじめ英国の博物館・美術館附属図書室を調査した。多くの館に協力いただき幅広く調査した中から、博物館における図書室の役割、オリジナル（原資料）とデジタル資料の活用について事例を紹介し、ここに報告するとともに当室での可能性を探っていく。

1. 大英図書館（British Library）とコンサベーションセンター（Centre for Conservation）

大英図書館（以下、BL）では、コンサベーションセンター（以下、BLCC）とデジタル画像の撮影・編集が行われているスタジオを視察し、専門技術者から説明を受けた。その後、東アジアコレクション日本部司書から日本関係資料の利用状況や資料収集についてお話を伺った。

セントパンクラス敷地内には、2007年に開設したBLCCと撮影・編集スタジオがあり、これらは自館の資料のみならず、世界中の紙資料のコン



【写真1】大英図書館外観

サベーションとデジタル化の拠点となっている。BLでは1つの資料について、オリジナルとデジタル画像どちらも提供することを基本としており、資料を活用すると同時に保護する手段として、デジタル化とコンサベーションは切り離せない関係にある。BLCCは主としてオリジナル資料を提供するため、個々の資料の現状を活かしつつ閲覧利用できる状態にする。作業方針はIFLA（国際図書館連盟：International Federation of Library Associations and Institutions）の原則に則り、オリジナルを尊重し破損部分を繕う程度に留め、接着にはでんぶん糊を使用し可逆性を保っている。また、オリジナルと修理箇所を糸の色を変えるなど視覚的に判別できるようにするとともに、破損状況や修復の履歴を細かく記載したカルテを作成し、後世に引き継いでいる。

一方、撮影スタジオでは資料をデジタル化するための撮影や画像処理はもちろん、撮影をするために必要な解体や破損箇所の修理も撮影と平行して行われている。BLのデジタル部門は、EU加盟国の博物館や美術館、図書館が所蔵する書籍・文献・映像・絵画などを検索し無料で閲覧できるEuropeana¹⁾プロジェクトに大きく貢献した。デジタル化する資料の選定は各部門のキュレーターからリクエストされたもので、修理や付属資料の撮影の要否など全てキュレーターに一任されている。これらの情報はシステムで一括管理され、各担当の作業に反映される。画像データはJPEGとTIFFを使用しているが、撮

影・保管はRAWで行い、使用するときフォーマットを変換している。作業現場では、撮影した全ての画像を実物と同じサイズに拡大し、細部までチェックしていた。

これらの他に、外部資金による修復・デジタル化プロジェクトも多数進行している。今回、外部資金による事例として、3つの現場を見ることができた。

①国際敦煌プロジェクト (The International Dunhuang Project) ²⁾

このプロジェクトは、中国の甘粛省敦煌市近郊及び新疆ウイグル自治区トルファンで発見され、イギリス・フランス・中国・韓国・日本などに分蔵されている敦煌文書をデジタル化し、オンライン上で共有した情報を基に世界各地で研究が進められている。その修復作業を視察した。

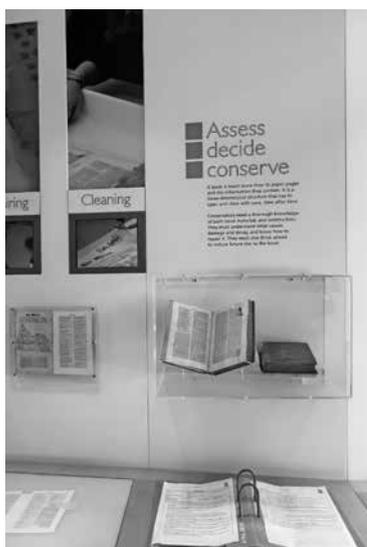
砂にまみれ水が加わり固まった紙をほぐすのは困難な作業で、取り出した2～3cm程のピースを和紙で裏打ちしてから撮影し、IDPのウェブサイトへアップしている。撮影が終了したものは、パーツごとにポリプロピレンでパウチされ、デジタル画像とともに実物も閲覧できるようにしている。

②カタールファンディング³⁾による資料の調査及びデジタル化

BLはカタール・デジタル図書館⁴⁾を開設するために、カタール財団とカタール国立図書館と協力して活動している。今回はそのカタログニング作業を行っているところを視察した。ここではまず、デジタル化する資料の選定からはじめ、関連書籍を収集し調査を行っている。デジタル化した資料は、OCR処理されテキスト検索(英語のみ)も可能になっている。

③出版社と協力してのデジタル化

BLが所蔵している資料の画像を出版社が購入し書籍化するため、館内で撮影作業を行っている。我々が訪問した時には、米国の出版社Cengage Learningが、BLが所蔵する18世紀に発行された書籍の画像を購入したため、それらのデジタル化作業が行われていた。撮影した画像は出版社へ販売するとともに、館内でも保存し活用する。



【写真2】 コンサベーションセンターエントランス
修復技術を紹介する展示がある



【写真3】 コンサベーションセンター内
天井の北向き窓から自然光を取り入れている

今回、それぞれ性質の異なるコンサーベーションとデジタル化の現場を見て、当室でもこれから資料のデジタル化を進めるにあたり、このような様々なアプローチ方法は今後の参考となるだろう。

続いて、東アジアコレクション日本部司書からお話を伺った。BLは1973年に大英博物館の所蔵品を引継いで設立された。その際、錦絵など1枚刷りの絵が多いものは博物館、文字が多い冊子体はBL、1枚刷りの地図は博物館とBL古地図部へと所蔵品を分けた。日本部門ではそれらの貴重な資料に加え、日本の文学・歴史・言語・芸術分野の資料、特に古典籍と社会科学に関して日本語で書かれた資料を収集している。

利用者は日本から訪れる研究者が最も多い。これは貴重書もデジタル公開の有無の区別なく、オリジナルを手にとって見ることができるからに他ならない。デジタル資料はもとより、オリジナルも含め、全ての資料に対してアクセシビリティが確立されていると感じた。パブリック・アクセスが根づいていることと、組織内にBLCCと撮影スタジオを有することがそれを実現させているのだろう。

また、当室では今まであまり扱ってこなかったマンガの選書について伺ったところ、具体的な規定は無いが既に作者が他界している場合は評価が定まっており、新タイトルが出ないため購入計画が立てやすいという点から収集を検討しているという具体的な話を聞くことができた。今後、当室で購入を検討する際は参考にしたい。

貴重書の選定については、発行年代で区切り江戸時代以前のを貴重書とすることが多いが、明治以降に出版されたものでも貴重な資料は多数あり、一律で線引きすることはできないという。当室でも、江戸時代以前に出版された資料は収蔵庫に納め、明治以降に出版された洋装本を図書室で閲覧に供している。運営上一律に線引きをしているが、中には当てはまらないものもある。当室では貴重書を選定し、コレクション化するための基準を模索しているが、やはり資料に対する詳しい調査と専門知識が必要だと再認識した。

2. 大英博物館各部門図書室/スタディールーム

(The British Museum Departmental libraries and Study rooms)

大英博物館（以下、BM）には、部門ごとにLibraryやStudy room（以下、図書室）が設けられており、今回はそのうち6ヶ所について訪問調査を行った。また、アジア部日本セクションにおいては、デジタル化の進捗状況や選書等に加え、資料公開に対する日本と英国の考え方の違いを伺い、今回の執筆にあたって大きな影響を受けた。

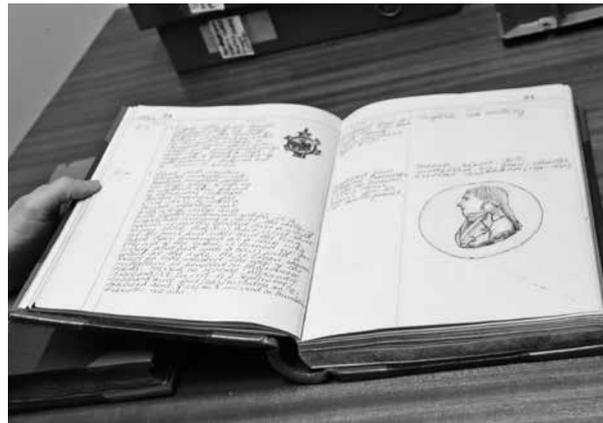
まず各図書室だが、いずれも司書は1名で他に事務スタッフや非常勤、ボランティア等で運営



【写真4】大英博物館グレート・コート



【写真5】手紙等問い合わせの記録をまとめたもの



【写真6】手書きの資料収集記録（レジストリ）

(大英博物館理事会の許可を得て掲載)

されている。図書室全体の窓口的役割を持つAnthropology Library and Research Centreは一般公開されているが、他の図書室の利用は予約制で事前の調査が必要となる。各部の図書室は、それぞれの専門分野に特化した分類方式で管理されている。これらはライブラリーカタログ・オンライン⁵⁾で一括検索できる。しかし、全ての図書が登録されているわけではなく、整理の進んでいないものや別管理されている資料もある。日本セクションの図書はアジア部とは分けて管理されており、共同研究協定の一環としてセインズベリー日本藝術研究所の司書が月1回程度来館し、NACSIS-CATに登録・管理している。これら図書室の編成や基本データは、前項の楯石もも子の報告【表2】・【表3】を参照いただきたい。

図書資料のデジタル化の進捗状況については各図書室ごとにばらつきがある一方、博物館資料のデータベース⁶⁾は充実している。日本セクションでは浮世絵などコレクション毎に作品のデジタル化を進めており、版本は所蔵品全ての撮影を完了し公開されている⁷⁾。同時に、申請があれば利用目的に係わず全てのオリジナル資料を閲覧することができる。その際、閲覧場所に図書室が利用され、調査・研究に図書室の資料が活用されている。他にも、市民向けに資料の同定やワークショップを定期的に行い、市民と博物館資料をつなぐ役割を図書室が担っている。

また、BMの歴史を示すアーカイブを重要な資料と位置づけ、部門図書室ごとに管理している。今回訪問時には、1771年発行の展示カタログや、1856年から1992年までの手書きの資料収集記録（レジストリ）、1861年から1960年までの手紙など問い合わせの記録を1年ごとにまとめて製本したものなど、他にはない貴重な資料を見ることができた。この他、博物館全体の運営に係わる資料は、セントラル・アーカイブに保管されている。現在これらの資料は各図書室で保管されているが、ゆくゆくはBM全体で整備されるのが理想だという。司書たちは自館のアーカイブを作っていくという意識が強く、館自体の歴史の違いを感じた。当室も設置から四半世紀が過ぎた今、創設時の資料が散逸する前に自館のアーカイブを確立していくことを検討していきたい。

3. ヴィクトリア&アルバート博物館 (Victoria & Albert Museum) 及び ナショナル・アート・ライブラリー (National Art Library)

ヴィクトリア&アルバート博物館（以下、V&A）では、アジア部門のキュレーターから浮世絵など日本関係資料の保存や教育普及活動について、併設されているナショナル・アート・ライブラリー（以下、NAL）では司書から蔵書構成や運営について聞き取りを行った。

NALは年間3万人の利用があり、その半分を学生が占めている。他は研究者やデザイナー、オークション関係者が多い。蔵書の40%が写本や貴重な書籍で、V&Aで展示に使用する図書のほとんどはNALが所蔵している。

V&Aは、1851年に開催されたロンドン万国博覧会の出品物と収益を元に設立された経緯があり、博物館の歴史を語る上で重要なアーカイブとしてロンドン万国博覧会関連資料を所蔵している。ドキュメント・カタログ・図書・エフェメラ類など様々な種類が含まれるこれらの資料は、特別委員会による助成金によってすべてデジタル化し公開されている⁸⁾ほか、オリジナルの閲覧も可能である。この他、NALは展覧会カタログ約10万点に加え、17世紀以降のオークションカタログ約10万点という世界でも有数のコレクションを所蔵し、アート市場の情報拠点となっている。

V&Aでも前述の館と同様に、全ての収蔵品について希望があれば個別に閲覧対応している。さらに、15年ほど前から「Japanese Print Education Book」と題して、V & A所蔵の美人画・役者絵・武者絵・風景画等様々な浮世絵を30～40枚取りそろえて館内のPrints and Drawing Study roomに置いている。これらは予約無しでいつでも見ることができる。本物に触れる体験によって資料をより身近なものに感じ、興味を持つきっかけとなるのではないかと感じた。



【写真7】ヴィクトリア&アルバート博物館中庭



【写真8】NAL閲覧室



【写真9】NAL入口前の展示
「The Artful Book : 70years of The Folio Society」

4. セインズベリー日本藝術研究所リサ・セインズベリー図書館

(Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures Lisa Sainsbury Library)

1999年に研究所が設立され、2003年に図書館⁹⁾が開館した。司書1名で運営しており、利用には予約が必要となっている。蔵書数4万～4万5千冊の内、登録は約1万5千書誌。特別コレクションとして、1522年から明治初期までの外国で作成された日本の地図約100点と日本から見た外国が描かれた浮世絵を所蔵している。蔵書の70～80%は日本語の資料で、AlephとNACSIS-CATへ登録し、日本語・英語のほか海外の日本研究者のためにローマ字で検索できるようにしている。現在、日本国内では海外へ発信するために資料に英語名が付与されているものがあるが、英語の正式な標題がない場合も多く表記に揺れがある。そのため海外の日本研究者の多くは、原題をそのままローマ字読みにして扱うことが多い。国際日本文化センターをはじめ国内でも一部の機関では既にローマ字検索を実用しているが、より専門性の高い検索を実現するために、英語のほかローマ字での登録の必要性を改めて感じた。



【写真10】 リサ・セインズベリー図書館閲覧室

また、研究所では講師を招き毎月第3木曜日に講演会を行っている。参加は無料で、専門家だけでなく地域の人々に開放されており、日本文化の普及に寄与している。我々が訪問した時は、米国カンサス大学で日本の食物の歴史を研究しているEric Rath教授の「Eating contests in early modern Japanese entertainment media」を聞くことができた。講演会では当館所蔵資料『青物魚軍勢大合戦之図』などが引用され、海外からみた日本の食文化の特異性や視点の違いを感じた。講演会終了後には、海外からのアクセスの向上を望む声も聞かれた。

5. 国内での事例として、立正大学古書資料館

英国での調査で、資料へのアクセシビリティの違いを感じた。そこで日本国内に目を向け、貴重書を書庫に眠らせず活用している事例として、立正大学古書資料館¹⁰⁾を視察した。

こちらは江戸時代の和古書を中心に貴重書・特殊資料（卷子本・折本・函物等）などを約4万5千冊所蔵しており、古書をもっと身近に感じ、有効活用してもらいたいという思いからその8割にあたる約3万8千点が開架に並び、利用者自身で書棚



【写真11】 立正大学古書資料館閲覧室

から自由に取り出して閲覧できる。研究者からは使い勝手がよいと評判なほか、講習会参加を機に初めて古書に触れ連日通う人もおり好評を得ている。開館当初は古書を開架に置くことによって細かい規則が設けられ、それを利用者が煩わしく感じるのではと懸念したそうだが、実際は利用者の順応が早く、自由に手にとって見られる利便性のほうが歓迎されている様子だった。

また、利用が増えることによって資料の劣化・損傷が危惧されるが、開館にあたってそのような声は少なく、貴重資料の公開に前向きな意見が多かったようだ。開館から4年が経過した現在、開架が原因の資料の劣化や破損は見られないとのこと。古書の扱いに慣れている利用者が多いこともあるだろうが、1日に複数回の館内の巡回や温湿度・害虫・結露等の確認を行うなど日々のIPM活動があつてのことだろう。

所蔵資料は館内での閲覧のほか、オンライン公開も進めている。ホームページからデジタル資料を確認し、さらに詳しく調べるため館に足を運ぶ利用者も多く、来館動機のひとつになっているとのこと。色味や筆圧など実物を見ないとわからないものもある。やはり、オリジナルとデジタル両方の資料を用意しておく事が必要だと感じた。

おわりに

今回の英国調査を通して現地で感じたのは、デジタル資料はもとよりオリジナルへのアクセシビリティの高さである。BM日本セクションで、英国はパブリック・アクセスの意識が高く、資料を市民に提供し活用することが博物館の使命のひとつであるという話を伺った。その考えがデジタル・オリジナルともにアクセスの良い環境を作っているのだろう。その中で図書室は、博物館資料の閲覧や調査、デジタル資料の提供に必要なメタデータの整備など、市民と博物館資料をつなぐ役割を担っていた。

現在、デジタル資料の提供は至上命題となっている。デジタル画像は拡大や明るさが自由に調整でき肉眼で見るとよりも鮮明に細部を確認できるという利点がある。さらに、画像に解説や翻刻を加えるなどの加工をすることで、専門家ではない人も利用しやすく、コレクションに興味を持ち、博物館資料をより身近なものとして感じるきっかけとなるだろう。また、デジタル化することでオリジナルの保存にも有益である。しかし、デジタル画像だけで全てが足りるわけではない。筆使いや素材など、原本でしかわからない事もある。デジタルの利便性とオリジナルの単一性、どちらも重要であり、ニーズに合わせた様々な形・媒体での資料提供が求められている。

規模や利用者数が違うため、各館のサービスをそのまま当てはめるのは難しい部分もあるが、今回調査した事例を踏まえ、博物館付属図書室として資料の活用と保存を両立し、より多くの人に当館の魅力を発信していく図書室となるよう努力していきたい。

最後に、今回の調査はセインズベリー日本藝術研究所司書の平野明氏に各館の担当者をご紹介いただいたことで、短い準備期間にもかかわらず多くの場所を訪問することが叶った。そして、訪問した各館でもとても親切にご対応いただき、滞りなく調査を行うことができた。協力して下さった皆様に、心より感謝申し上げます。

【註】

- 1) Europeana
<https://www.europeana.eu/portal/en>
- 2) The International Dunhuang Projectホームページ
<http://idp.bl.uk/>
- 3) 大英図書館カタール財団のパートナーシップ
<https://www.bl.uk/projects/british-library-qatar-foundation-partnership>
- 4) カタール・デジタル図書館 (Qater National Library)
<https://www.qdl.qa/en>
- 5) 大英博物館ライブラリーカタログ・オンライン (蔵書検索データベース)
https://bmus.ent.sirsidynix.net.uk/client/en_US/default
- 6) 大英博物館コレクション・オンライン (収藏品画像データベース)
http://www.britishmuseum.org/research/collection_online/search.aspx
- 7) 大英博物館浮世絵閲覧システム
http://www.dh-jac.net/db/nishikie/search_bm.php
大英博物館古典籍閲覧システム
http://www.dh-jac.net/db1/books/search_bm.php
- 8) National Art Library ロンドン万国博覧会コレクション概要
<http://www.vam.ac.uk/content/articles/n/national-art-library-great-exhibition-collection/>
The Royal Commission for the Exhibition of 1851 (特別委員会オンラインカタログ)
<http://www.calmview.eu/RoyalCommission1851/CalmView/default.aspx>
- 9) セインズベリー日本藝術研究所リサ・セインズベリー図書館
<http://sainsbury-institute.org/library/>
- 10) 立正大学古書資料館
<http://www.ris.ac.jp/library/shinagawa/kosho.html>